



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第508号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第508号. 京大東アジアセンターニューズレター 2014, 508

ISSUE DATE:

2014-03-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182899>

RIGHT:

目次

- 読後雑感 : 2014年 第7回
- 読後雑感 : 2014年 第8回
- 上海街角インタビュー ⑳
- 【中国経済最新統計】

読後雑感 : 2014年 第7回

26. FEB. 14

中小企業家同友会アジア情報センター代表
東アジアセンター外部研究員(協力会副会長)
小島正憲

1. 「寡黙なる巨人」 2. 「定年後のリアル」 3. 「医者考える“見事”な最期の迎え方」 4. 「生きる。死ぬ」 5. 「孤独な死体」

1. 「寡黙なる巨人」 多田富雄著 集英社文庫 2010年7月25日

この本は、昨年、私が読者の方々に、ダッカでの緊急入院の顛末をお知らせした後に、親切な読者の方から「ぜひ読むように」と紹介していただいたものである。この本は、著名な免疫学者である多田氏が脳梗塞の結果、生死の境をさまよい、生き残ったものの半身不随と言語障害を抱え、その後の人生を苛烈にしかも有意義に生きて行く闘病記である。多田氏は、「寝るにも起きるにも介護の手を借りなければならない。私は理想の死に方さえ奪われてしまったのだ。死線をさまよって生き返った身だ。死はもう怖くない。発作直後は、苦しさのために死ぬことばかり考えていた。今でも死を思わぬ日はない。でも、こんな体では理想の死に方といわれても、答えに窮する。出来ることが、あまりにも限られているからだ」と書き、自分の体が自分一人ではまったく動かせず、したがって死ぬことすら自分の意思通りにできないことを、嘆じている。

一昨年末、私もダッカの工場で、小脳梗塞で倒れ、緊急入院後、日本に搬送された。幸い、私の場合は、まったく後遺症がなく、現在、通常生活を送っている。したがって多田氏のような壮絶な体験をしているわけではない。しかしそれには「運良く」という表現があてはまるわけで、私も多田氏のようになっていた可能性はある。したがって多田氏のようになっていれば、「老人決死隊」などという「理想の死に方」も、飾り文句にしか過ぎなくなる。多田氏のこの本を読んで私は、「せっかく神様に助けられた命だから、精一杯、社会のお役に立って死ぬるようにがんばりたい」と、決意を新たにされた次第である。

「解説」で友人の養老孟司氏が、「寡黙なる巨人」の中で、私の胸を撃つ記述がある。病気の前に自分は生きていなかったが、病を得てからは、毎日生を感じているという意味のことである。これだけは現代人の心になんとしても届いて欲しいと、私が思うことである。多田さんは動く指ただ1本で、これだけの作品を書いた。あんなら、なにを寝ぼけてるんや。五体満足でなにをブツブツいうんか。ふざけてんじゃない」と書いている。私は、この言葉を胸に刻み、私に残された時間を、五体満足なうちに、フル活用したいと思っている。

なお、「寡黙なる巨人」というこの本の妙な題名は、本文中の、「私はかすかに動いた右足の親指を眺めながら、これを動かしている人間はどんなやつだろうとひそかに思った。得体の知れない何かが生まれている。もしそうだとすれば、そいつに会ってやろう。私は新しく生まれるものに期待と希望を持った。新しいものよ、早く目覚めよ、今は弱々しく鈍重だが、彼は無限の可能性を秘めて私の中に胎動しているように感じた。私には、彼が縛られたまま沈黙している巨人のように思われた」という多田氏の記述から、それを読み取ることができる。

また、本文中には、多田氏の臨死体験が生々しく、かつおどろおどろしく書き込まれている。

2. 「定年後のリアル」 勢古浩爾著 草思社文庫 2013年8月8日

帯の言葉 : 「なにをしなくてもいいし、なにもしなくてもいい。」

不安をあおるメディアに振り回されず、お金も仕事もない毎日を“ほんわか”と生きるために」

この本での勢古氏の結論は、「定年後に夢や希望はあるのか？」は人に訊くようなことではない。あたりまえのことだが、夢や希望がどこかに転がっているわけではない。はい、あなたの定年後の夢と希望はこうすれば手に入ります

よ、と他人が教えてくれるものではない。夢や希望はあるのか？ではない。そんなものは外のどこにもない。あるとしたら、一人ひとりの中にしかない。自分自身で考えて、つかんで、実行しないかぎり、夢も希望もどこにも存在しないし、永遠に手に入らない」、「定年後、残りの人生をベストに過ごすにはどうしたらいいのだろうか？」というような問いに対しては、たった一言でもって完璧無比に答えることができる。「あなたの好きなように生きてください」である。絶句しないでいただきたい。これ以上明確な答えはないはずである」というものである。至極、当然な言い分である。以下に要点を記す。

- ・78歳で亡くなった上坂冬子がこう言っている。「人生は長生き競争ではないのだから、ただ長く生きればいいというものでもあるまい。死にごろというものがある。“死にごろっていえばいまごろがちょうどいいんじゃないの”と、無責任に言った人があるが、正論に対して怒るわけにもいかない。たしかに70代という年齢は、コワイものもないし、ものごとへの異常な執着もなくなって、心地よい世代ではある」
- ・定年後というより老後に、自分はもしかしたら孤独な老人になるのではないかと、妻にも見放され(先立たれ)、子どもも近寄らなくなってひとりになるのではないかと、という不安は、少なからぬ人が抱いている不安ではないだろうか。いやもうわたしはすでにひとりだよ、という人もいるだろう。
- ・老いたときにかぎらず、人が恐れるのは孤独である。人は社会的動物であるから、人のなかで生きることはあたりまえである。「ひとりぼっち」といういい方は、すでに物悲しい。けっして喜ばしい言葉ではなく、喜ばしい状態ではない。だれもが、できれば避けたい状態である。わたしもおなじである。
- ・だが、どんなにさみしくても、孤独でも、どうしようもないとしたらどうなのか。だから、それがどうした、と居直るしかない、と私は思っている。孤独でいいじゃないか、と思うか、どうしようもねえぜ、と思うか。もしくはそんなことを考えることをやめようとするだろう。「おれはさみしい」なんか、思わないこと。思っても「それがなんだ？」と自分にいいたい。
- ・生活の不安といえば、60歳よりは20歳の方が大きいかもしれない。なにしろ先が長い。60歳はあと20年ほどだが、20歳はまだ60年もあるのである。が、そんな先のことは考えてもしかたがないし、若者はいつまでも若いと思っているから、この不安に切実感はない。まだ60年も生きられるという安心感のほうに不安を上回るであろう。つまり死への不安はない。死など、ほとんど無限の彼方である。
- ・昨今の少子高齢化や若年層の生き難さの問題などを見ると、人間はいきづまっているように見えてしかたがない。政治は民主主義、経済は資本主義と市場主義、社会は自由主義と権利主義(こんな言葉はないが)。いずれも現時点において人類の叡智が到達した理想的な地点といっている。これらを超える思想はまだ現れていない。が、そこでどんづまっているのもたしかである。山積する「問題」でどんづまり、なによりも頭でっかちになった人間がどんづまっている。

3.「医者が考える“見事”な最期の迎え方」 保坂隆編著 角川 ONE テーマ21 2014年1月10日

帯の言葉：「成熟した大人たちの終着点」

保坂氏は、はじめにで「人間はいつか死ぬということを思い知らなければ、生きていることを実感することもできない」というドイツの哲学者ハイデガーの言葉を紹介し、最後に「最上のものは、まだ先にある。人生の最後、そのために生命の最初はつくられた…」というイギリスの詩人ロバート・ブラウニングの詩の一節で締め括っている。つまり、この本は題名を「医者が考える…」としているが、「哲学者が考える…」にした方がよいような内容の本である。また保坂氏は本文中で、臨死体験についての記述を行っている。以下に要点を記す。

- ・死ぬ時期や死に方をコントロールすることまでは考える必要はないと思いますが、ときには、自分の死についてイメージしてみてもいいのではないのでしょうか。イメージを描けば、自然にそのイメージに近づいていこうという気持ちになるものだからです。そして、死のイメージが強ければ強いほど、その死の日までの生き方に妥協しなくなり、自分に厳しくなるでしょう。
- ・現在、日本の人口の4人に1人は高齢者です。その多くは仕事をしていません。満足すべき額ではあるかどうかはともかく、年金で暮らし、あり余る時間をもてあますだけという人も少なくないようです。年金受給日にはパチンコ屋やゲームセンターが高齢者で混み合うという話を聞いたりすると情けないとも思えてきます。
- ・少し前までは、一人暮らしの高齢者・独居老人は「身寄りがなく、寂しく、わびしい」存在だとみなされることが多かったものです。ところが最近では、「1人のほうがわずらわしくない」と積極的にひとり老後を選ぶ人もあり、ひとり老後は増える一方。1人で暮らすということは、ある意味で、もっとも自分らしく生き、暮らすことで、人としての最高の生き方だと言えるでしょう。
- ・ちょっと身もフタもない言い方をしますが、医学的に言えば、人は亡くなる1日前くらいから、脳の活動が低下していき、1人か、家族に囲まれているか、というような意識はほとんどないと考えられます。これは神の加護とでもいえるべきもので、お蔭で亡くなるときには痛みも苦しみもほとんど感ずることなく、おだやかに向こうの世界へと移行していけます。つまり、死とは、もともと孤独であるものなのです。それなのに、こと改めて「孤独死」という言葉が叫ばれるようになったのは、ひとえに社会的な問題意識からでしょう。
- ・孤独死という言葉などなかった時代の1959年4月30日、裸電球がぶら下がり、クモの巣が張った部屋の万年床の

中で咯血して死んでいる79歳の老人がいました。その姿を見れば、貧しく孤独な老人の死というイメージを描くのではないのでしょうか。ところが、この老人の正体は文化勲章を受章した大作家であり、かたわらのポストンバッグには2334万円を超える残高を示した預金通帳と現金31万円が入っていました。大卒の初任給が1万円に届かなかった時代の2000万円超の預金です。現在ならば数億円に相当するでしょう。永井荷風は人気作家で、一生困らないだけのお金がありながら、世間一般的な「よい暮らし」には目もくれず、「人に三楽あり。一に読書。二に好色。三に飲酒」の三楽を追いかけ、何にもとらわれず、わずらわされることのない自由と言えば自由、放埒といえ放埒な日々を送ります。その果ての孤独死でした。臨むように死んでいったといえるかもしれません。荷風の死は、私たちに人は好きなように生きる権利があるのと同じように、好きなように死ぬ権利もあるというメッセージを伝えるものだとはいえるかもしれません。

- ・日本人の死生観は他の多くの国と異なり、いかに長くとか、不老長寿を願う発想はあまりなく、死は人生の終わりではなく、人生の一部として潔い死を選択してきたことが特徴だと、京都大学こころの未来研究センター教授であるカール・ベッカーは言っている。
- ・現代の日本人は、いま改めて、日本人の精神風土に合い、現代の社会事情にも合った新たな死生観を探っているのかもしれません。
- ・死んだら人はどうなるか。それについて、答えられる人はいません。そのため、死への不安や恐怖を持つ人が少なくないのが実際です。そこで私は、そうした不安を持つ患者さんには、5つの仮説をつくって紹介し、私たちの生命は死後もなんらかの形で存在し続けることを話しています。
 - ①死後生仮説。人間はトランスパーソナル(物質としての存在を超えた精神的な)存在であり、その意味で「自分という意識(魂)」は肉体的な死を超えて永遠の存在である。
 - ②生まれ変わり仮説。人間の本质は、肉体に宿っている(脳とつながっている)意識体(魂)であり、学びの場である物質世界を何度も訪れては、生と死を繰り返しながら、数多くの人生体験を通じて成長している。
 - ③ライフレッスン説。人生とは、さまざまな試練や喜びを通じて学び、成長するための機会であり、自分自身で計画した問題集である。だから人生で直面するすべての事象には深い意味や価値があり、あらゆる体験は「自分自身で計画した順調な学びの過程」なのである。
 - ④因果関係説。人生では、「自分が発した感情や言語が巡り巡って自分に返ってくる」という「因果関係の法則」が働いている。この法則を活用して、愛のある創造的な言動を心がければ、自分の意志と努力によって、自分の未来を変えることができる。
 - ⑤ソウルメイト説。自分に最適な両親(修行環境)を選んで生まれるのであり、夫婦・家族・友人などの身近な人々は「ソウルメイト」として、過去や未来の数多くの人生でも立場を交代しながら、身近で生きてきた。

4.「生きる。死ぬ。」 土橋重隆・玄侑宗久対談 ディスカバー21 2013年12月15日

帯の言葉：「芥川賞作家の禅僧とガン医療の第1人者が語り尽くす！ 死と闘わない生き方とは」

この本は帯の言葉通り、「芥川賞作家の禅僧とガン医療の第1人者」の対談であり、きわめて面白い。両者はガンについて、世間の一般常識にとらわれず、また「ガンと闘うな」とも言わず、「ガン＝ストレス説？」を展開している。

- ・土橋：必然性があるというのは、もちろん、死ぬための必然性ではなくて、生きるための必然性、体全体から見ると、そういう必然性を促す働きをガン細胞は持っている。つまり、生命を長生きさせようとしているのです。
- ・土橋：近藤先生は完全にエビデンス(科学的根拠)の世界、完璧にデータを取って、データと臨床を重ね合わせて理論を組み立てておられますよね。だから、論点の違う既成の医学とは、ケンカするしかない。エビデンスをもとに主張されていますから、相手も論争しようと思ったら、エビデンスで対抗するしかない。
- ・土橋：医者には病気を治すだけでなく、いちばん最後の卒業式のやり方について、つまり、死についてもっと学ぶ必要があるでしょうね。これからの時代、生と死の両方を語れる医者が必要とされてくるんじゃないかなと思うんです。
- ・玄侑：ええ。それで初めて生命を扱ったことになるでしょう。
- ・土橋：乳ガンの場合、カギはストレスですね。過去のある期間、強い肉体的ストレスを受けた人が左乳ガンに、長い期間をかけてじわじわと、精神的なストレスが蓄積されていった人が右乳ガンになりやすいんです。
- ・土橋：肺ガンの人は、病気が怖いんです。胃を病む人は、何か頼まれごとがあった時に、引き受けるかどうかをとことん悩むんです。でも肝臓を病む人は、とりあえず引き受けちゃう。引き受けちゃってから悩む人というのが、肝臓、胆嚢に来るような気がします。
- ・玄侑：ある臓器にストレスが集中し、ガンが現れるのは、そこにその人のヒストリー、性格が関与しているからだ、というのが先生の考えですね。
- ・土橋：医者の背後には、国や厚労省、それを支える製薬メーカー、さらには国際的なオイルビジネスと、利益を循環させる「山分けシステム」が存在しています。「患者さんのため」と言いながら、自分たちは安全な枠の中にいる。国はシステムを維持するために存在しているようなものですから、実際のところ、患者さんのことなんて何も考えてないんですね。

- ・玄侑:ガリレオの時代の教会が宗教的見解に固執していたように、いまは科学としての医学に固執してしまっている。医学というものは、肉体だけでなく、心だけでもなく、「身心」という全体を扱うわけですから、本当は科学には収まりきらないはずですが、いまは多くの人が科学というものに固執しているわけでしょう？
- ・土橋:余計なことを言うよりは、科学的な裏付けのある、ガイドラインに沿った医療をすることで自分自身を守っているという。要するに、医者には訴訟が一番怖いんです。結局、入学試験で医者になっていただだけで、医者として適性があるかどうかのチェックが何もない。試験は暗記力の勝負ですからね、医学部に入ったとしても、実際は暗記力だけなんですよね。
- ・玄侑:切るのがうまいと、切りなくなっちゃうという面がどうしても出てきますよね。
- ・土橋:はい。手術がないと外科医は元気が出ないんです。切るのが嫌いな外科医なんていませんよ。
- ・土橋:概念が山ほどある病気が、ガン(癌)であると、いろいろなことを思い、考えすぎることによって起こる病気なんだと。
- ・玄侑:考えすぎ、悩みすぎ、頭でっかちになりすぎが、ガンを生む最大の要因。考えることは流れを止めることですから、生きているものの流れを止める。
- ・土橋:ガンが治る人は、上手にガンというものとつきあっていて、いろいろ大変なことがあっても、最終的には自分の味方になっている。次の人生のプラスに変えているんです。
- ・玄侑:ストレスや心の問題を絡めることで、肝臓がいまこうであるという全体的なことが見えてくる。そこを切っちゃえばどうかなるとか、痛みがなくなりさえすればいいとか、そういう発想はあり得ないんですね。
- ・土橋:ガンというのは、生命が生き延びるために登場させた、最後の助っ人という感じがするんですよね。ほかの発熱とか痛みよりはるかに強烈な、「ここまでやるから後は自分で頑張りなさい」というような。
- ・土橋:人にはそれぞれの思考パターンがある。長年の習慣でもあるので、あまり自覚されていないが、私はそれを、①科学的思考、②宗教的思考、③哲学的思考の3つのパターンに分けて考えるようにしている。現代の日本人の多くは、①の科学的思考の割合が大きいだろう。実際、医者は肉体に起きた変化を「数値」と「画像」という事実に表示して診断、治療を行っているし、患者さんの多くもそれを受け入れているだろう。これに対して②の宗教的思考は目には見えない「神仏」や「奇蹟」を絶対的的前提としている。この場合、数値や画像は必要とならず、目の前に起きた事実は前提にはならない。③の哲学的思考は、これらの前提そのものを置かず、つねに「なぜか？」を問い続け、起きた現象の「意味と関係」を追求していくものだ。

5.「孤独な死体」 上野正彦著 ポプラ新書 2014年2月5日

副題：「法医学で読み解く日本の今」

帯の言葉：「孤独に死んでいった彼らの死を、これ以上無駄にしてはいけない」

この本の著者は、「昭和から平成になるまでの30年間、東京都監査医務院に所属し、検死、解剖した遺体は2万体制を超える」という監察医である。著者は、「特に、わだかまりを持ち続けてきたのは、子どもや高齢者の自殺である。…彼らはどうして自らの命を絶とうと思ったのか」と疑問を抱き、それを解明するためにこの本を著したという。しかしその割には、本書ではその回答らしきものは書き込まれていない。私は題名につられて、この本を読んでみたが得るものは少なかった。

それでも高齢者の孤独死に関する下記の記述は、参考になった。

- ・少し古いデータ(1994年)であるが、高齢者の自殺率と世帯の形態について、「本来孤独感が少ないと思われる同居世帯の方が一人暮らしの高齢者よりも自殺率が高くなっているということは、精神的には一人暮らしよりもむしろ同居の中での距離・孤立を感じる場合も多いということがうかがえよう」。
- ・家族と同居の方が、自殺率が高くなるというのは、家族内のいざこざがあるから。つまり、家庭の中にも疎外感や孤独を感じるからなのではないか。
- ・心身機能の低下に伴い、社会的役割もなく、また収入の減少もあって、家族の厄介者扱いになり、疎外されてしまう老人たち。信頼する仲間(家族)からのけ者にされる寂しさは、老人にとって耐え難い孤独なのである。一人暮らしが孤独のように見えるが、その方が遠慮もわだかまりもない気楽な生活が送れることもある。
- ・一人で暮らしていれば孤独というわけではなく、信頼する家族や仲間から疎外されることの方が耐え難いのである。
- ・結局、三世同居に老後の幸せな暮らしを求めるよりも、ある程度一人が好きなのであれば、一人暮らしを選んだ方がずっと豊かな老後を送ることができる場合もある。
- ・福祉大国といわれる北欧の国ですら、高齢者が家族の中で疎外されているという。スウェーデンには、「母親は12人の子どもをくまなく育てるが、12の子は一人の親を持て余す」ということわざがある。
- ・アルコール依存症の人には動脈硬化が少ない。にもかかわらず、心筋がダメージを受けている。飲み過ぎれば心筋梗塞と同じように心筋にダメージを与えるが、晩酌1、2合ぐらいで飲んでいれば、動脈硬化にもならず、健康にはいいのである。
- ・飲酒の量と健康リスクとの関係は、脳梗塞、心筋梗塞、糖尿病などにおいて、まったく酒を飲まない人よりも、少しだけ飲むという人のリスクの方が低く、飲酒量が増えるにつれてリスクが高くなる Jカーブの曲線をとることが通説とな

っている。

以上

読後雑感：2014年 第8回

28. FEB. 14

中小企業家同友会アジア情報センター代表
東アジアセンター外部研究員(協力会副会長)

小島正憲

1. 「70歳まで働く」
2. 「一生楽しく働ける50代からの起業」
3. 「定年後の起業術」
4. 「2回以上、起業して成功している人たちのセオリー」
5. 「起業家のように企業で働く」

1. 「70歳まで働く」 週刊東洋経済:2/15 東洋経済新報社 2014年2月15日

副題：「45歳から考える“次の仕事”」

週刊東洋経済の2/15号は、「70歳まで働く」という特集を組んでいる。その P.67で、私のことが紹介されている。私が年頭に発信した「老人よ 世界にはばたけ」の文章を読んだ東洋経済誌の記者が、書いてくれたものである。

この特集では、近い将来、「70歳まで働く」ことが必要とされるとして、その理由を、「サラリーマンの人生設計が、大きく変わりつつある。要因の一つは、昨年から希望者に対する65歳までの雇用延長が企業に義務付けられたこと。もう一つは、老齢年金の支給開始年齢が将来は70歳前後まで引き上げられる可能性が高いことだ。そうなれば70歳まで働かないと経済的に立ちゆかないケースが増える」と書いている。さらに、「皆が75歳まで働くための40歳定年制＝40歳前後で定年を迎えたら、再教育機会を得た上で新たな職場で再度雇用契約を結んだりするという考え方」も紹介している。これを読んでいると、70～75歳まで働くのが、既定路線のような気にならされてくる。そのためには、45歳くらいで起業か転職をすることが有利であると、この雑誌は特集を組んで、喧伝しているのである。

この特集では、「多くのサラリーマンは、入社20年すぎ、年齢でいえば45歳前後に実質的なキャリアの転換点があるのを実感しているだろう」、「起業にしろ、再就職にしろ、武器となるのは、これまでの仕事で身に付けたノウハウや人脈。会社で10年以上続けた仕事であれば、それを核に、自分の“ワザ”を磨くことだ。そのワザを求めている職場はたくさんある」、「また中国や東南アジアでは、日本のシニアへの期待が高まっている。技術者のニーズが高いのはもちろんだが、小売業やサービス業でも日本のノウハウは求められている。海外に活躍の場を求めるのも、決して絵空事ではない」、「会社の業務をこなしつつ、“次の仕事”を目指してワザを磨く。それは自分のためであり、結果的に会社、ひいては社会のためにもなる取り組みではないだろうか」と主張している。私は、これは正論であると思う。私は昔から、「何ごととも10年やればベテランの域に到達することができる」と主張し、10年ごとに人生を転換する「10年一節」を体現してきた。ことに、この特集が主張している45歳前後の転換点の42歳で、海外へ飛び出し、3回目の人生転換を果たした。

さらにこの特集では、シニアの起業に関して、「ゆる起業」をすすめている。そしてその場合、いちばん問題になるのは、「シニアは“やりたいこと”を探すのに苦労しがちである」と書いている。これについて、P. 59では、「人生のちょうど真ん中50歳もう一度立てるスタートライン」という対談がある。そこにはライフネット生命保険会長の出口治明氏の、「僕は30代の頃、60歳ぐらゐの先輩に“石の上にも3年という言葉には重みがあるぞ。お茶でもお花でも小唄でも、何でも3年やったら物になる。だから10年もあれば3つもできるんだ」と言われたことがあります。50歳の時点では30年もあるのですから、やりたいことが10個もできるということでしょう」という言葉が紹介されている。私は、シニアにとっては、この視点が重要であると思う。

なお、本特集では、高齢者が活躍している職場や「ゆる起業」が、実際例で豊富に紹介されている。犬の散歩代行業などの事例は、本当におもしろいと思った。

2. 「一生楽しく働ける50代からの起業」 吉原直樹著 角川 SSC 新書 2014年1月25日

副題：「スモールビジネスのすすめ」 帯の言葉：「“Ash”のカリスマ経営者がすすめる定年前の起業」

著者の吉原氏は、「日本を元気にするには、50代より上の世代が社会で元気に活躍することが解決策になると考えています」、「仕事があるということ、自分の存在を社会が必要としているということは、素晴らしいことです。70歳もしくはそれ以上の年齢まで、自分のチャレンジ意欲をかき立てながら社会で活躍するというのはどうでしょう。起業は素敵な人生を送る一つの方法です。人生80年の時代、60歳、65歳からさらに先の人生を素敵なものにする“シフトチェンジ”をお勧めしたいと思います」と書き、そのためには50代での起業が最良のタイミングであると主張している。以下に吉原氏の「50代起業のススメ」を本文から抜き書きしておく。

- ・最近の日本では、実質年齢は戸籍年齢の8掛けとよくいいます。
- ・経営者に大事なことは、決断することです。

- ・ローリスク・ミドルリターンで始める。
- ・ベンチャー・ビジネスや起業家などの華々しいイメージをはずす。
- ・昔に取得しただけで使っていない資格はすでに使い物にならず現在価値はゼロです。
- ・会社で専門的な仕事をしていて、他に代わる人がそういない専門性を持っているとしたら、社員ではなく外部の専門家としてその仕事をするのも成立します。
- ・監査役とか社外取締役のように第三者の視点で会社の経営をチェックする役職は、それほど大きな会社でなくとも必要性が高まっています。そのような役職に複数の会社で就くような個人になるというのも独立の方法でしょう。
- ・失敗が起きたときのことを事前に準備しておく。失敗したときの風景を思い描いておく。
- ・50歳前後の起業の行動論としては、親の面倒の見通し立てるとともに、親の財産は事業資金と切り離して考えるべきです。
- ・起業する段階で引退のイメージを持っておく。

3. 「定年後の起業術」 津田倫男著 ちくま新書 2014年2月10日

帯の言葉：「プロが教える起業の技術と精神 生き甲斐のある第2の人生のために」

本書で著者の津田氏は、「平均余命が長くなり、定年退職後も20年も30年も生きられるようになった昨今、人生の終わり方には工夫が必要です。その意味で“シニア起業”はほぼ最適のものと言えるのではないのでしょうか。成功しても失敗してもあなたの人生の終わりにふさわしいドラマが待っていることはほぼ間違いないからです。そのドラマを快適なものにするためのヒントを本書ではここそこに述べました」と書き、「定年後の10年を“人生最高の10年”として下さい」と結んでいる。私もこの津田氏の意見に同感である。以下に津田氏の“ヒント”を抜き書きしておく。

- ・今後の起業の方向性は、日本の持てる人(大企業や役所)からできるだけ遠いところで、彼らの関心をあまり引かない目立たないやり方で勝負する、ということになりそうです。
- ・熟年だからこそ成功する利点。①年の功がある。②人の縁がある。③師がいる。④信用がある。⑤お金がある。
- ・これからは、人生は60代からが勝負になります。それまでの会社人生、役所人生に終止符を打って、新規まき直しで人生をやり直せます。サラリーマン時代に不遇だった人こそ、定年起業で報われます。
- ・60歳定年ならその3年前くらいから準備するのがよいと考えます。
- ・シニアの長所となる経験と智慧が邪魔になることもあります。成功体験を捨て去らねばならないときもあるのです。
- ・起業に際しては、誰がなんと言おうと、多くの人に反対されようと自分はどうしてもこの事業を起こしたいという切実な要求がなければなりません。
- ・起業家に唯一必要不可欠な要素があるとすれば、それは「楽天性」です。
- ・資金を十分に持ち、経営者が暴走しないようなチェック&バランス機能を備え、競合の動きを常に注視し、社員を遊ばせないようにすることが、創業者であるシニア起業家が、なすべきことです。
- ・社長という肩書きを嬉しがって自分で働くことをしない人はそもそもベンチャーに不要です。

4. 「2回以上、起業して成功している人たちのセオリー」 博報堂ブランドデザイン アスキー新書 2013年8月10日

帯の言葉：「何度やっても成功する“連続起業家”は 考え方がちょっとだけちがう」

この本の著者たちは、日本の多数の連続起業家を調査研究することによって、成功する8つのセオリーを導き出している。それらは一般常識からすると、かなり異見であるが、私にはきわめて納得がいくセオリーである。ことにそれらを導くキーワードが「思い込みから自由になること」であり、まさに「わが意を得たり」という感じでもある。

- ・セオリー1 「市場調査を信じない」：「市場調査から学ばなくてはならない」という思い込みから自由になることで、マーケティングや企画での発想の自在性を獲得。
- ・セオリー2 「事業計画にこだわらない」：「事業計画は守らなければならない」という思い込みから自由になることで、事業の柔軟性を獲得。
- ・セオリー3 「キャリアを積み重ねない」：「キャリアは積み重ねていくべきもの」という思い込みから自由になることで、ネットワークや利害関係といったさまざまな“しがらみ”から脱却。
- ・セオリー4 「度胸で勝負しない」：「事業では勇気を持って勝負すべき」という思い込みから自由になることで、リスクとリターンの関係を把握する冷静さを獲得。
- ・セオリー5 「運がいいと信じている」：「非科学的なものを想定すべきではない」という思い込みから自由になることで、偶発的な出来事や理屈で説明のつかないものをも選択肢に含め、トラブルをもチャンスに変える発想力を獲得。
- ・セオリー6 「なにを」より「だれと」：「なにをやるかをまず決めるべき」という思い込みから自由になることで、組織としてもっとも能力や持ち味が発揮しやすい状態をつくる。
- ・セオリー7 「弱み」に徹する：「弱点は克服しなくてはならない」という思い込みから自由になることで、ダイレクトに「強み」を生かすことに集中できる。

・セオリー8「競合」ではなく「協業」：「ライバル企業には勝たなくてはいけない」という思い込みから自由になることで、競争という余計な行為に労力を費やすことなく、本来やるべき事業自体に注力できる。

その他、著者たちは次のようなことも指摘している。私の体験上からも、これらはきわめて重要であると思う。ただし、この本で著者たちが連続起業家のモデルケースとして取り扱っているのは、ほとんどがIT関連やサービス産業で、日本の誇る「ものづくり」業は皆無である。つまり製造業の連続起業は難しいということであり、反面、ITやサービス産業の連続起業はやりやすいということである。結局、現在はIT全盛の時代であるから、その意味では起業がやりやすい環境になっているということでもある。

- ・ある種の臨場感をもって情報を共有しているということ、「臨場知」と呼んでいます。「臨場知」は、調査の主役となりやすい平均値から外れた異常値も感知します。イノベーションは周縁から生まれると言われるように、「つぎ」のヒントは往々にして異常にあるもの、「臨場知」を自身の中にかたちづくることで、彼らはイノベーションが生まれる土壌をつくっているのです。
- ・連続起業家たちはほぼ全員が、非常に綿密に現状を分析することに長けており、つねにリスクを細かく、具体的に洗い出しています。それもきわめて慎重に、そのうえで、どこまでならリスクを取れるのか、どうすればリスクに対応できるのかと考え、それを具体的な課題に落とし込みます。要は、なにがリスクかをきちんとわきまえているからこそ、それ以外の行動には迷いがなくなるということ、彼らは、臆病にすら見えるほどの重要な視点を持つことで、じつは積極性の下地をつくっているのです。
- ・はっきりと「運」を「タイミングをつかむための努力の結果」とであると定義づけています。
- ・通常は、自分の弱みに気づくと努力してそれを克服しようとしがちですが、連続起業家たちはいい意味でそれをあきらめています。無理に自分を変えるのではなく、「補う」つまり得意な人に「お願い」することで、問題に対処する傾向があります。いってみれば「弱みに徹している」のです。

5.「起業家のように企業で働く」 小杉俊哉著 クロスメディア・パブリッシング 2013年10月11日

副題：「企業で働くにも“起業家”マインドは必須の時代」

上掲の4著書でも明らかなように、現代人にとって、起業という道に進むことは、人生の勝利者になることでもある。この本で著者の小杉氏は、「企業の中で、起業家精神を養え」と主張している。私もこの意見に賛成である。企業に在籍している間に、起業家的立場で仕事することは、企業にとっても、やがて起業する個人にとっても、大きなプラスとなる。就職活動を行っている人たちは、給与や労働環境よりも、個人に起業家的発想で仕事をさせるような企業を選ぶべきだろう。この本は、あまり深い内容を持っている本ではないが、「企業で起業家精神を養え」という主張をしているという点で、評価できる。以下に、要点を記す。

- ・企業で働くにしても、自ら仕事を作り出し、自らの責任において行う、すなわち「自律」が必要。
- ・自分が考えたアイデアを、今度は金を出す「資本家の立場」になって考えてみる。リスクやリターンについて、「事業家の立場(借る側)」から見ていた時とはまったく異なる世界が見えてくるはずだ。
- ・優れた経営者、組織のリーダーというのは、道なきところに道をつくる人だと思うのです。目の前に壁がふさがっていったら、それこそ地下に坑道を掘り、空を飛び、海を泳げばいい。目標に到達すれば、どんな手段だっていいわけです。
- ・社内で「起業」「転職」できるのが企業にいる最大のメリット。
- ・新規事業に手を上げる。社内で起業できるチャンスを逃す手はない。
- ・ひとつ確実に言えることは、リスクをとって難易度の高い仕事をやらない限りは、飛躍的な成長はないということだ。10回やれば9回失敗している。一直線に成功ということはほとんどありえないと思う。成功の陰には必ず失敗がある。
- ・提案や変革をして来なかった人には、むしろ、何をやっていいかわから考えなければならない。そして、思考錯誤しながら何かを作り上げて行かなければならない中小起業、ベンチャーの仕事は極めて難易度が高いということになる。
- ・常に1人称で考える。
- ・世の中に失敗というものはない。チャレンジしているうちは失敗はない。あきらめたときに失敗である。

以上

上海街角インタビュー ㊶

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集団董事（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

「中国人は漢文（文言文）が読めるか」

蘇州の寒山寺には有名な「楓橋夜泊」をはじめ境内のいたるところに詩碑がある。現代中国は簡体字が普及しているので、殆どの人は繁体字で書かれた詩碑は読めないと思って、一緒に行った友人に読めるかと尋ねたところ、「大体読める、しかし、詩碑は文言で書かれているので、意味がよく分からないものも多い」とのことであった。

高校で習った日本の古文は万葉仮名のような変体仮名で書かれているものは全く歯が立たないが、現代の仮名で書かれたものはある程度意味を汲み取ることが出来た。

中国では書き言葉を文言、話し言葉を白話というが、現在では書き言葉も95%が白話となっているという。中国ではどのように古文としての「漢文」を習うのか？ 現代中国人はどの程度「漢文」を理解出来るのか興味を涌いたので聞いてみた。

1. 20 歳代後半の女性

中学校では「国語」の時間があって、文言で書かれた漢文を習いました。但し、漢字は簡体字になっています。繁体字で書かれた古い文章を少しは読めますが（繁体字から簡体字をかなり推測出来る）、古い文章と今の文章は文法が違うので難しい文章は意味が判りません。学校では中国の古代の有名な文章を習いましたが、詩碑は先生に解説してもらわないと殆ど意味が判りませんでした。しかし、比較的新しい時代の小説は大体読めるようになりました（但し簡体字で書いたもの）。

2. 30 歳代前半の女性

中学校では文言で書かれた漢文を習いました。漢字は簡体字になっていました。古い時代の文言文が難しいのは繁体字、簡体字という字体だけでなく、現代文と違って、言葉が省略されているからです。今、我々が使っている从（〜からという意味）のような介詞を使っていません。ですから、このような文体に慣れないと文言で書かれた文章は理解できません。私は明朝以降に書かれた文章なら90%以上理解することが出来ます。繁体字で書いてあっても問題ないです。特殊な繁体字以外は推測がつかますから。文言で書かれた文章を読むのはやさしいとは言いませんが、それほど難しいことはありません。歴史や古典に興味があるかどうかのポイントです。最近の中国では歴史や古典が軽視され、人々はこれらに興味を持たなくなってきました。歴史や古典から学ぶことがいっぱいあるのに残念です。

3. 40 歳代前半の女性

清朝後半以前に書かれた文言と以降に書かれた文言では大きく違います。清朝後半以降に書かれたものは物語が多く、文言でも話し言葉で書かれています。したがって、これらは読むのにあまり苦労しません。私は書道をやっているので繁体字を学びましたが、簡体字で書かれたものなら100%理解出来ます。

私は高級中学（高校）で“古文”の成績が80点以上あった人なら、まず問題なく清朝後期以降に書かれた文言文文章が読めると思います。清朝後期以前のものもかなり読めるでしょう。

4. 40 歳代後半の男性

学校の教科書は“古文”を含めてすべて簡体字ですし、出版されている古典小説でもすべて簡体字ですから、読むという点で言えば読むことが出来ます。仮に繁体字で書かれていても高卒以上の人ならば簡体字を推測することが出来ますからかなりの程度読めるでしょう。

中学校では3行くらいの長さの古文文章を習いました。高校では1ページの古文文章になりました。いわゆる古文書は非常に簡略して書かれているので、先生の解説がないと全く理解できませんでした。私だけでなく、古文書解読の訓練を受けた人でないと無理でしょう。しかし、古典小説、たとえば「紅樓夢」「水滸伝」「三国演義」だと、300年くらい前のものなので、高卒以上で、読む気があれば100%とは言わないまでも、大体は読めます。1500年前の古文、たとえば「史記」は読んでもなかなか意味が分からない。さらに孔子時代の文章ですと、素人では絶対に読めません。

5. 30 歳代後半の男性

昔の文言文は書くための専用の中国語で、特権階級が独占した一種の技です。少数精鋭しか使えないような構造になっていました。一般庶民が使っていたのは話し言葉としての白話文です。文言文は「技」ですから、韻を踏んだ非常に美しい言葉になっています。リズムの美です。近世になって白話文で小説などが書かれるようになって、官僚の文章は文言文で書かれていました。「技」を持つものの誇りがあったのでしょう。現在のような白話文による書き言葉を普及させたのは魯迅です。今の中国では簡体字であって

も文言文が書ける人は国民の５％もないでしょう。でも、昔の文言文が完全に忘れ去られたかという、そうではなく、今でも白話文で文章を書くときに、昔の言い方を引用したり、演説文では韻を踏むことを重視したりします。

私は文言文が好きなので、この「技」を勉強しています。私のまわりには同好の士が集まっていますが、同僚は「物好きだ」と冷たい目で見ているようです。

インタビューをした人達の話から、現在の中国が“文言文”教育をかなり重視している様子を感じ取れた。どうやら高校まできちんと勉強しておれば、“文言文”で書かれた小説程度は読めるようである。しかし、伝統的な文法による文言文を書ける人は少ないようだ。

日本で“候文”が書ける人が殆どいなくなったのと同じことであろうか。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2					1549	20.3	24.9				
10 月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11 月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12 月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012 年						2303	7.9	4.3				
1 月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2 月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3 月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5 月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6 月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7 月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8 月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9 月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10 月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11 月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12 月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013 年												
1 月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2 月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3 月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4 月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5 月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6 月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7 月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8 月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9 月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10 月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11 月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12 月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014 年												
1 月				2.5		319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易であ

る。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。